『続猿蓑』「八九間」歌仙の添削範囲

――芭蕉一門の「匂付」を付合語で解明する試み――

大城悦子

はじめに

『俳諧七部集』所収の七俳書のうち唯一芭蕉没後の出版である、『続猿蓑』に載る「八九間」歌仙には、芭蕉真蹟添削草稿（『芭蕉全図譜』岩波書店、一九九三）の存在が知られている。本稿では、その芭蕉真蹟添削草稿の句形と版本の句形との双方を付合語を用いて読み解き、添削がどのような範囲で行われたかを検証し、得られた結果を分析して、芭蕉一門のいわゆる「匂付」解明の一助とする。

芭蕉没後四年の元禄十一年に刊行された『続猿蓑』は、後世『俳諧七部集』にも選定され、広く読まれている。しかし、江戸時代以来、越人の支考偽撰説に代表されるように、芭蕉の本書への関与を疑う説があり、何丸のように『俳諧七部集』から除くことを主張する者もあったが、その後、本稿で扱う芭蕉真蹟添削草稿や、本書に言及した複数の芭蕉書簡などの資料が公表・翻刻されたことから、芭蕉の本書への関与が明らかになってきた。筆者も同意する、現代の通説によれば、当初、「八九間」歌仙の連衆である沾圃らが企画し撰した集があり、芭蕉がその稿本を携えて、元禄七年夏に上方に旅立ち、同年秋に郷里の伊賀で、支考とともに稿本に手を入れ編集を終えた。九月には『続猿蓑』の題名も決まり出版に備えて下清書にとりかかっていたが、十月に芭蕉が没して計画が頓挫した。その後、刊行までに支考による改変があったと思しいが、その程度や経緯は不明である。

以上の成立経緯もあり、本書の評価は論者により様々だが、本書が『炭俵』とともに芭蕉晩年の「かるみ」の俳風を示している、との点では、現代の論者の見解は一致している。

『続猿蓑』の巻頭は、芭蕉の「八九間空で雨降る柳かな」を発句とする、沾圃・馬莧・里圃との四吟歌仙である。三ツ石友昭「宝生

沾圃小考 付里圃のこと」（『連歌俳諧研究』七五号、一九八八・七）によれば、本書の企画者と目される沾圃は、宝生流の能役者で、露沾などに仕えた後、江戸に出て、若年の宝生十一世の後見となる。芭蕉晩年の門人で、元禄六年三十一歳にして、芭蕉の後見の下、母方ゆかりの立圃二世を継ぐ。馬莧は鷺流の狂言師で、初名は権之丞。里圃は、沾圃の能楽の弟子山田市之丞ではないか、とされる。

この歌仙の芭蕉真蹟添削草稿は、伊賀に伝来し、文化年間に名古屋の士朗門下の李東の所有するところとなり、李東は文化八年に『八九間雨柳』と題して模刻出版した。さらに、李東の曾孫鈴木康平氏も大正十三年に写真版を添えてその復刻版を刊行している。

一、捌き手の役割

富山奏「「八九間雨柳」の歌仙の連衆―その草稿と板本との相違の意味―」（『高野山大学国語国文』八号、一九八二・三）において、氏は芭蕉真蹟添削草稿に記された作者名の書体を検討され、四句目以下は、一巻全体の句を書き終えた後で「機械的に四人の連衆の名を当てはめた」もので、「発句以下整然としている板本の方の作者名の記載」「は全く形式を完備させただけのもの、と解するのが妥当であ」り、「それはあくまでも、芭蕉の行った処置であった」とされる。その添削についても「彼は自己一個の独断で、自由自在に、まことに詳細で徹底した推敲添削の手を加えて」おり、「このようにして完成したこの歌仙は、四吟の形式であっても、その実質は、芭蕉の独吟と称してもよいのではなかろうか。」とされる。

筆者も、富山氏の説に大筋では賛成するが、本歌仙の添削を特殊例とは考えない。一般に、俳諧においては、連衆から提出された句は、執筆による指合の検討を経て、其の座の宗匠たる捌き手により吟味され、採否を決定される。捌き手は、一巻の変化展開や一句の表現を考えて、必要とあれば原句を添削し、しかる後に付句として治定する。このような行為を積み重ねて歌仙を巻き終えた後も、捌き手は一巻全体を見渡して推敲するのが常である。また、作者名についても、必ずしも実際の作者の名になるとは限らない。なかなか句の出ない初心者のために、捌き手や熟練の連衆が代作することはままあるし、一巻を巻き終えた後、全体の句数や月花の句の配分を考えて、作者名を変更することもある。このような行為を、美濃派では「名配（なはい）」と称して、現代でも行っている。ただし、俳諧が座の文芸である以上、捌き手の添削や作者名の変更の自由度は、興行の性格によって異なる。例えば、貴人の句や、旅先の興行・他門の連衆との興行の場合は、何らかの配慮や遠慮があり得る、と考えられよう。しかし、同門のみの座で、一門の宗匠が門人を捌く場合は、遠慮のない添削や作者名の自由な変更がなされ得る。同門のみの座でも、興に任せた詠み捨ての一巻の場合は、出句者であると同時に読者でもある連衆が一座の感興を享受できれば目的は達成されたのであり、「文台引おろせば則反古」（『三冊子』「赤冊子」）とその後

の推敲を省略することもあるだろうが、宗匠にその一巻を撰集に載せる意図がある場合は、宗匠は第三者たる一般読者を想定しながら全力をもって推敲に当たり、納得の行く形で世に問おうとするはずである。本歌仙の添削は、まさにこの場合に当たる。

二、初折裏一句目の添削の意味

現在までのところ、芭蕉真蹟添削草稿の句形から版本の句形への添削を誰が行ったか、特定できる資料はない。富山氏は、前掲論文で「両者の間に、芭蕉の手に成る未見の完稿の存在を想定」され、阿部正美「八九間雨柳の巻の推敲過程」（『芭蕉俳諧の展望』所収、明治書院、一九九〇）、佐藤勝明・小林孔「『続猿蓑』「八九間」歌仙分析」（『近世文芸 研究と評論』第八十号、二〇一一・六）も同様の立場で論を進められている。

筆者も、以下の二つの理由から同様に考える。第一に、この歌仙を代作改変する必要が支考にはない、と考えるからである。第二に、三章以下に詳述するように、本稿において付合語の連想関係を用いて検証した結果、芭蕉真蹟添削草稿の句形から版本の句形への添削が、一定の範囲内に留まっていることが明らかになったからである。

イ、裏一句目草稿の「猿」の含意

「八九間」歌仙において芭蕉真蹟添削草稿の句形と版本の句形とを比較したとき、最も句形が異なっているのは、裏の一句目である。すなわち、草稿では、初案が「手を摺て猿の五器かる草庵　見」であったのが、「草庵」を見せ消ちにして右に「旅の宿」と改めてある。ところが、『続猿蓑』では「渋柿もことしは風に吹れたり　里」と、全く異なる句形になっており、また、作者名も草稿の馬莧から里圃に変更されている。

これについて、伊藤正雄氏は『俳諧七部集 芭蕉連句全解』（河出書房新社、一九七六）において、草稿の句形「では雑の句になって、秋三句の約束に合はない」故の改変で、「表五句目の初案」「の「柿」を削った上で、この裏一句目に「渋柿」として再生させた」と指摘され、阿部氏も『芭蕉連句抄』第十一篇（明治書院、一九八八）で伊藤説を支持しており、佐藤氏・小林氏も「一応の解答」として承認している。筆者も大筋で同意する。

ところが、草稿の句形から版本の句形への改変の効果については、伊藤氏が、草稿の句形では「〈猿引が泊った宿で、手を摺って猿の五器（椀）を借りる〉といふのか、〈猿自身が手を摺って、宿の人から五器を借りる〉の意か、両様の解釈が成り立」ち「猿の五器の句では要領を得ない」。一方、前句の「「肌寒うなる」から風のけはひを感じ取り、台風で田や畠のものが不作の上に、渋柿までもやられた体とした」版本の句形は、食料という面に注目し「「狗脊かれて」に「渋柿」の異変を取合はせたのは照応を得てゐよう。この句には、柿の梢を仰いでの嘆息の声が窺はれる」として肯定的なのに

対し、阿部氏は『展望』で、草稿の句形を「猿引きが旅の宿（或いは自分の茅屋）で猿の食器を貸して貰つて食事をするといふユーモラスな場面を、前句の肌寒さを感ずる時節に配したのであつた」と解釈し「これはこれで面白い」とされる一方、版本の句形は「落寞狼藉たる荒年の山村の光景と、それを嘆く村人の情が描かれたわけである」と伊藤氏と同様の解釈をされながら、「前句のしみ〴〵とした感味に比べて、この句の表現は余りにも粗く、打越から三句も景を主とした句が続くのも変化に乏しい嫌ひがあつて、成功した運びとはいへない」として否定的である。しかし、草稿の初折裏一句目は「ユーモラスな」だけの場面なのであろうか。阿部氏は裏二句目の解説において、「一つの疑問は、草稿の原案の場合、」裏一句目と二句目との「一聯は、付筋がどうも取留めのない点である」とされるが、あるいは、阿部氏がこのような結論に至ったのは、氏の裏一句目の解釈が誤っていた為ではないだろうか。

佐藤氏・小林氏による最近の肯定的見解、すなわち「秋三句の約束違反（目録までこの点が見過ごされているのは不審）」以上に「初案の発想が、『猿蓑』「市中は」歌仙の「茴香の実を吹落す夕嵐　去来／僧やゝさむく寺にかへるか　凡兆／さる引の猿と世を経る秋の月　芭蕉」に大きく重なること」が問題で、「成案形は、実はこれも「実を吹落す夕嵐」の発想を借りながら、前句との間に独自の場面を構成し、理想とする新たな付け方を示したものであった」と併せて、以下に検討する。

この問題を解決するために、まず、連歌・俳諧において「猿」から連想することを許容された語を調査し、「猿」のイメージを探る。『俳諧類船集』「猿（サル）」の項には三十八種の付合語が並ぶ。そのうち、『連珠合璧集』及び深沢眞二編著『近世初期刊行 連歌寄合書三種集成』（清文堂出版、二〇〇五）所収の『随葉集』『拾花集』『竹馬集』の何れかに載る寄合語は、「巌（イハホ）・岩間・深山・峰の庵・木の実（ミ）・夜の雨（雨夜）・木の葉・衣うるほす涙・ねられぬ柴の戸・時雨・柴栗（クリ）・かけはし・時鳥・宿直（トノヰ）・日吉」で、『類船集』には採られていないが上記連歌寄合書に載る寄合語「さけぶ・梢をつたふ・月をとる・木滋きかげ（こぶかき陰）・岩や・淋しき心（山あひさびしき）・峯の嵐・山里・秋山・みねの雪・山水の月・はなざかり」をも含め、連歌寄合語には、深山や山里を思わせる語や悲愁の情を示す語が並び、そこから窺える「猿」のイメージは、すべて野生の猿で、山に住む隠者や山里の住人がその声を聞いて涙を催すものである。なお、『類船集』のみに見られるこの系列の語に「西川（京都府を流れる桂川の別称）・山のかひ・とち・柿（カキ）・さはぐ心・大豆・ならの枯葉・霜夜・四国・嵐山」がある。

一方、加藤定彦編『初印本　毛吹草』（ゆまに書房、一九七八）と『類船集』に載る付合語「轡（クツワ）・戸・鷲（ワシ）・歌舞伎（カブキ）おどり」のうち、「轡・戸」は戸締まりのための具の意の「猿」を含む猿轡・猿戸からの連想であり、「鷲」は「鷲の見つけた子猿」すなわち、身動きもさせないこと、絶対に逃がさないことの喩からの連想であろう。

ともに「猿」を含む熟語・諺からの連想で、『類船集』のみに載るこの系列の語に「七つ時（申の刻）・眼（猿眼）・上手の弓（上手の猿が手を焼く）・山門のつり鐘・娌（ヨメ）とり（猿婿入）・犬（犬猿の仲）・きびす（猿踵）」がある。また、『毛吹草』と『類船集』に載る付合語「歌舞伎（カブキ）おどり」と同様に芸能に関連する付合語で『類船集』にのみ載る語に「馬屋・壬生念仏」がある。なお、『毛吹草』には「心・菓」も載るが、それらは、より細分化されて『類船集』に吸収された、とみるべきであろう。俳諧において加わった「猿」のイメージは、人間が見いだした猿の特徴を示す連想である。

それではここで、芭蕉における「猿」のイメージを探る。

尾形仂他編『新編芭蕉大成』（三省堂、一九九九）には、猿を詠み込んだ芭蕉の発句が四句挙げられている。『野ざらし紀行』に載る貞享元年の作「猿を聞人捨子に秋の風いかに」は文学の伝統の中の猿を詠み、『猿蓑』に載る元禄二年の作「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」は嘱目の猿を詠み込んでいる、という違いはあるが、ともに野生の猿を詠み、猿は憐憫の対象とされている。ところが、『続有磯海』などに載る元禄四年ころの作とされる「猿引は猿の小袖をきぬた哉」は、猿と常に生活を共にする猿曳の哀感を詠んでいる。さらに、『薦獅子集』などに載る元禄六年の歳旦句「年々や猿に着せたる猿の面」があるが、この句について、許六は『俳諧問答』（『蕉門俳論俳文集』古典俳文学大系10所収、大内初夫氏担当）で、芭蕉が「ふと歳旦に猿の面よかるべしとおもふ心一つにして、取合たれば、仕損の句也」と述べたと記し、土芳は『三冊子』「赤冊子」で「此歳旦、師のいはく、人同じ処に止て、同じ処にとしどし落入る事を悔ていひ捨たる、となり」と伝えている。この句の猿は、芭蕉自身の意図としては、歳旦の感慨を述べるために考え出された、芭蕉あるいは人の世の象徴である。

さて、『新編芭蕉大成』所収の芭蕉出座歌仙の付句にも猿を詠み込んだ句を二十余見いだすことができるが、そのうち、元禄二年の「奥の細道」の旅までの付句は、「猿行（ママ）腸のくさる悲しび」（「月と泣夜」歌仙　天和二年）、「蔦の葉は猿の泪や染づらん」（「秣おふ」歌仙　元禄二年）、「繋ばし導く猿にまかすらん」（「おきふしの」歌仙　元禄二年）の芭蕉の三句に限らず、他の連衆の付句も含めて、十二句すべてが野生の猿の生態と悲哀とを詠んでおり、これらの句は、伝統的な猿の詠み方の基本に基づいている。ところが「奥の細道」の旅の後、元禄二年冬に伊賀上野で巻いた「霜に今」歌仙の「春の来て猿に小歌を舞せけり　村鼓」を皮切りに、「さる引の猿と世を経る秋の月　芭蕉」（「市中は」歌仙　元禄三年）、「猿曳の月を力に山越て　芭蕉」（「五人ぶち」歌仙　元禄七年）、そして当該「手を摺て」句と、猿曳と猿を詠んだと思しい付句が四句見られる。なお、同時期の野生の猿を詠んだ付句は「猿のなみだがおつる椎の実　芭蕉」（『蓑虫庵小集』所収「木のもとに」歌仙　元禄三年）、「山あひに猿のさわたる枝つづき　史邦」（「ひき起す」歌仙　元禄三年）、「霧間分ゆく猿の寐所　沾荷」（「其富士や」歌仙　元禄六年）の三句で

ある。

以上の検証から、「奥の細道」の旅以降の芭蕉が、猿曳と猿を句材として意識していたことを確認できるが、猿曳とは如何なる者であろうか。『日本国語大辞典　第二版』の「さるひき（猿引・猿曳）」の項には、「①猿に種々の芸を教えこみ、これを演じさせて金銭をもらいうけるもの。すでに鎌倉時代からみられる。猿まわし。〈季・新年〉」とあり、『をだまき』（元禄四年本）などを用例に挙げている。また、「②江戸時代の被差別民の一種。江戸および関東方面などでは、穢多頭弾左衛門の配下に属し、その身分は、穢多と非人の中間とされた。江戸では猿飼頭長太夫、門太夫両人が支配した。猿舞だけでなく、厩の祓も行なった。猿飼い。」とあり、『好色一代男』巻三の一などを用例として挙げている。この辞書的な意味を踏まえ、「手を摺て」付句の句意を確定するために、村鼓の付句も含めて、当該句以外の猿曳と猿の句の共通する詠み方を探る。「春の来て」付句と「年々や」発句とは、ともに正月に猿舞をさせる猿曳を詠んでいるが、元禄六年の「年々や」発句は、元禄三年の歳旦句に『撰集抄』所収の乞食に身をやつした高僧の逸話を踏まえて「薦を着て誰人います花のはる」と詠んだ、芭蕉らしい歳旦句で、前述したように、単純に正月を寿いでいる句ではない。ついで、「猿ひき」の語を句に詠み込んだ三句だが、「猿引は猿の小袖をきぬた哉」「さる引の猿と世を経る秋の月」が秋の季語を含む秋の句であるのに対し、「猿曳の月を力に山越て」は、前後が春の句なので、「猿曳」を新年の季語として用いた春の句と考えられる。三句に通底するのは、猿と身を寄せ合うようにして生きる、猿曳の哀感である。猿の動作の連想が笑いを誘うことがあるとしても、句の眼目はあくまでも猿曳の哀感で、到底「ユーモラスな場面」とは言えない。

以上から、猿や猿曳はその哀感を詠むべきものと芭蕉は考えていた、そして、それは、俳諧的というよりは、連歌以来の伝統的な猿の詠み方の基本に沿ったものであった、と筆者は結論する。これは、『去来抄』「修行」（『蕉門俳論俳文集』所収）に「去来曰く「俳諧は新敷趣を専とすといへども、物［の］本性をたがふ［べからず。］」」とあるところに沿う方法である。

ロ、草稿初折裏一句目の句意と版本句形への添削の意味

ここからは、草稿初折裏一句目の解釈に入る。

この句の解釈の指針になるのは、前述した伊藤氏の見解である。氏は、草稿の句形では「手を摺る」のが猿か猿曳か「両様の解釈が成り立つ」とされる。

筆者は、この二様の解釈をまず考えてみたい。草稿初案の句形は、前句が「薄の穂からまづ寒うなる」、付句が「手を摺て猿の五器かる草庵」である。

『類船集』「五器（ゴキ）」の付合語に「高麗茶碗・新町・弁当・朽木」と並んで「大峰・乞食」が載るように、修行僧や乞食が食物を乞うために持っている茶碗を五器という場合がある。「五器を提げる」は

乞食をする意であり、「五器も持たぬ乞食」は全くの無一物の意である。管見の限りの先行研究にはこの指摘はないが、筆者は、草稿の句形はこの喩を踏まえて句作された、と考える。

手を摺るのを猿自身と考える場合の、筆者の裏一句目の解釈は、（山里の我が）草庵に、（末枯れの季節になって、よほど食べ物に窮したのだろう）猿が手を摺って（乞食をするのに必要な）五器を貸して欲しい、と頼んできた、である。現在でも、天候不順の年には、猿や猪・熊などが人里近くまで降りてきて作物などを荒らすことがある。江戸時代にはよくありがちな状況であったろう。猿の窮状を擬人化して表現した、と考えられる。

次に、「草庵」の住人が手を摺ると考える場合である。この句だけを読む場合は、山里の住人か隠者などが通りすがりの猿曳の猿に頼む、との解釈も成り立たない訳ではないが、芭蕉のこれまでの猿の句の詠み方から考えて、やはりこの住人は猿曳であろう。この場合の裏一句目の解釈は、（末枯れの季節の）粗末な家で（無一物になった）猿曳が手を摺りながら猿の五器を借りている、であろう。初案の「草庵」を「旅の宿」に添削したのは、この句の動作の主体を、旅に明け暮れる猿曳と明確にするためで、宿に払う木賃を猿の五器の実入りで賄おうとしている、の意であろう。両案ともに、猿曳の経済的に追い詰められた状況を描いた句で、哀憐の情を催さずにはいられない。

「手を摺る」という一見ユーモラスな動作の衣に包まれてはいても、草稿初折裏一句目の眼目は困窮した猿または猿曳の哀感であり、また、これこそが、それまでの芭蕉の句と共通の詠み方なのである。

前述のように、草稿句形から版本句形「渋柿もことしは風に吹れたり」に改めた理由について、草稿の句形「では雑の句になって、秋三句の約束に合はない」故の改変であるとの伊藤氏の指摘を、阿部氏は賛同し、佐藤氏・小林氏も一因であるとは認められている。

結論的には筆者も同意見なのだが、草稿句形が当初から雑の句として詠まれた、とは言えないのではないか、と考える。すなわち、『去来抄』「故実」で去来は「無季といふに二ツ有。一ツは前後・表裏、季と見るべき物なし。（中略）又、詞に季なしといへども、一句に季と見る所有て、或は歳旦とも、名月とも定るあり。　年々や猿に着せたる猿の面　ばせを　如斯なり」と述べている。去来は『旅寝論』（『蕉門俳論俳文集』所収）でも「年々や」の句に触れており、この句について去来が芭蕉に「「季はいかゞ仕べき」と窺（ママ）けるに「「としゞ」はいかに」との給ふ。いしくも承る物哉と退ぬ。「年々」は季の詞にあらず。かくの給ふ所しらるべし。表に季見えずして季になる句、近年付句等にも粗見ゑ侍る也」と記している。おそらく、芭蕉が江戸で「八九間」歌仙を巻いた一座では、裏一句目の原句「手を摺て猿の五器かる草庵」を秋の句とする了解があったのであろう。それでは、この句のどこが秋の句なのであろうか。まず、野生の猿を詠んだ句と解釈した場合、人里近くに猿が出没す

るのは、秋深くなってからであることは、連衆には自明のことであったろう。また、猿曳の句と考えた場合、秋は収穫の季節である。蓄えのない者にとって、収穫前や不作の秋は、生き延びるのに最も苦労する時期であろう。その庶民からの投げ銭で生きる猿曳にとっても、祭の時期が終わり、大名屋敷の厩祓などの実入りもある正月までに間のある、同時期は苦しい時期なのであろう。野生の猿か猿曳か、彼らが困窮し無一物になりやすい時期は晩秋、と江戸の連衆は了解したのだ、と筆者は考える。

しかし、客観的に見て、この句を秋の句と認めることには躊躇せざるを得ない。まず、句意そのものに種々の解釈が可能で、天候不順の秋の困窮を表現しようとした意図が明確には伝わってこない。また、芭蕉一門ではこの時期、句意による季の句を認めていたが、必ずしも一般的な考え方ではなく、この歌仙を版本に載せるについては、諸人が秋の句と認識できるように、句に季語を含める必要がある。おそらく、芭蕉も筆者と同様に考えて、草稿句形から版本句形への添削を行ったのであろう。

それでは次に、草稿句形と版本句形との関連を考える。版本の句形は、前句が「狗脊かれて肌寒うなる」、付句が「渋柿もことしは風に吹れたり」である。

前句すなわち表六句目は、草稿初案の「薄の穂からまづ寒うなる」を、草稿で「ぜんまひかれて肌寒うなる」と推敲し、更に版本は「狗脊かれて肌寒うなる」と文字を改めている。佐藤氏は「具象化により実感を前面に出す方向で、推敲がなされている」とされ、他の先行研究もこの添削を諒としている。筆者も同感だが、晩秋の野の景という眼目は変わらないことに留意したい。

さて、付句すなわち裏一句目だが、詳述してきたように、草稿初案の「手を摺て猿の五器かる草庵」を、草稿で下五を「旅の宿」と推敲し、版本で「渋柿もことしは風に吹れたり」と改めている。諸先行研究は何れも、この添削を、意味内容まですべて変えた大幅な改変と捉えているが、筆者はそうは考えない。天候不順な秋に困窮する悲哀という主題は変えずに、それをより明確に表現するための添削である、と考えるのである。芭蕉出座連句では、貞享元年成立の『冬の日』「霜月や」歌仙に「釣柿に屋根ふかれたる片庇　羽笠」の句が載るが、渋柿は、半熟になると収穫して皮を剥き、糸や縄につるして乾して、干柿（釣柿・吊し柿）にする。甘柿・渋柿はどちらも農家にとって大切な商品作物であった。

版本裏一句目の筆者の解釈は、今年は（嵐で、収穫前の稲ばかりでなく、貴重な現金収入源の）渋柿までも風で吹き落とされてしまった、である。秋の季語は「柿」である。

三、付合語の連想関係を用いた検証
―表五句目から裏三句目まで―

第二章で詳述したように、表六句目・裏一句目の二度にわたる添削は、主題は変えない範囲で行われていた。筆者の調査の結果、この原則は本歌仙添削の全体に及ぶものであったが、紙幅の関係でその全貌を述べることはできない。

本章では、まず、表六句目・裏一句目の添削の意味を、付合語の連想関係を用いて詳述し、次いで、裏一句目に関わる、表五句目から裏三句目までについて、付合語の連想関係を用いて添削の範囲を簡単に提示する。

筆者の検証方法については、「付合語に見る芭蕉出座連句の付合の種々相―夏と冬の付合を手がかりに―」（『近世文芸 研究と評論』第七十七号、二〇〇九・一一）ほかの拙稿で詳述したが、以下に簡略に説明する。基本は、『類船集』などの俳諧付合語集に載る見出し語は、その見出し語のもとの全ての付合語と連想関係にある、という考え方である。芭蕉在世当時に刊行されていた俳諧付合語集は、当時の人々が俳諧に用いることを許容した連想の集大成であり、芭蕉たちもこの連想からそれほど逸脱しない連想をしていたであろう、と筆者は考える。何となれば、俳諧は座の文芸であり、出句者兼読者である連衆に理解されない連想では付合は成立せず、また、版本の読者に理解されない連想は撰集に採用するのにふさわしくないからである。最も歓迎すべき連想は、意外性がありながら、納得する連想である。自ずと用いられ得る連想は限定されてくるはずである。

さて、筆者の方法であるが、従来は、俳諧付合語集の見出し語と付合語の一対一の連想関係のみが問題にされたが、筆者はそれ以外に、同一見出し語のもとの付合語相互も、見出し語を「連想を中継する語」として、連想関係にある、と考える。また、付合語は必ずしも句中の詞であるとは限らず、句意を指し示している場合もある、とも考える。ここまで敷衍して考えると、芭蕉出座歌仙のほとんどの付合を、付合語の連想関係で解釈することができる。ちなみに、芭蕉晩年の「疎句化」が進んだといわれる付合では、見出し語を「連想を中継する語」とする、いわば「ぬけ」の付合として解釈できる場合や、一句全体の句意を一つの付合語に凝縮して、それからの連想で付けてゆく、従来「余情を探る」付け方と称された付合と解釈できる場合が、大部分を占めている。

イ、表六句目・裏一句目の付合

①草稿初案の付合

表六句目　薄の穂からまづ寒うなる

裏一句目　手を摺て猿の五器かる草庵

前句初案にある「薄」または「尾花」を付合語に含む『類船集』見出し語のうち、「手を摺て」の句にも該当する付合語を持つもの

を探すと、「百舌鳥（モズ）」がある。すなわち、『類船集』「百舌鳥（モズ）」の項には「尾花が末・一村薄・淋しき枯野／賤が垣ね・山際の里」などの付合語が並ぶ。ところが、『連珠合璧集』の「鵙（モズ）トアラバ」の項にも「尾花がすゑ」があり、また『拾花集』の「秋之部・八月」に載る「百舌鳥」の寄合にも「尾花が末・一村薄・淋しき枯野／賤が垣ね・山際のさと」が見られ、『竹馬集』八月之詞「鵙」の項にも表記は多少異なるが同様の寄合が載ることから、この連想が連歌以来の伝統的付合発想であることを示している。この付合は、前句を「尾花が末・淋しき枯野」を詠んだ句と考え、それと連想関係にある見出し語「百舌鳥」を「連想を中継する語」として、「賤が垣ね・山際の里」を句意とする句を付けた、と読み解ける。また、連歌では、これが秋八月の寄合であったことも留意すべきであろう。こう解釈した場合、付句のどこが「山際の」を表現した詞となっているのだろうか。筆者は「猿」こそがその詞であると考える。二、イ、で詳述したように、連歌以来の伝統的な「猿」のイメージは、すべて野生の猿で、山に住む隠者や山里の住人がその声を聞いて涙を催すものである。芭蕉は晩年に猿曳と猿という新しい素材を用いはじめたが、その詠み方は、連歌以来の伝統の基本に従っていた。なお、「百舌鳥」を「連想を中継する語」とする連想において、猿が句作の素材に用いられたのは、或いは、両者の鳴き声の相似からの連想によるのではないか、と筆者は考える。

裏一句目は「賤が垣ね・山際の里」の天候不順な秋の困窮という主題を、猿または猿曳を素材として表現したのである。

②推敲後の付合

続いて、添削がどのような意図で如何になされたか、を考える。

草稿添削句形：前句　ぜんまひかれて肌寒うなる
　　付句　手を摺て猿の五器かる旅の宿

版本句形　：前句　狗脊かれて肌寒うなる
　　付句　渋柿もことしは風に吹れたり

裏一句目の添削理由については既に述べたので、結論だけを簡単に示す。添削後も草稿句形では、「「賤が垣ね・山際の里」の天候不順な秋の困窮」という主題が明確ではない。また、秋の季語がなく、一般的には秋の句とは認められにくい。そこで、素材を猿から渋柿に変えて季語を補い、主題をより明確に表現しようとしたのが、版本の句形である。

なお、二、イ、でも触れたが、佐藤氏は、草稿句形が『猿蓑』「市中は」歌仙から発想を借りた「二番煎じの着想」であったことが主な改変理由である、とされる。確かに、本歌仙の載る『続猿蓑』は、題名から考えても『猿蓑』を意識した集であることは明らかであり、佐藤氏の説は卓見と言えるが、筆者としては、その改変に際しても「「賤が垣ね・山際の里」の天候不順な秋の困窮」という主題が守られていることを強調したい。

ロ、表五句目から裏一句目までの付合

①草稿初案の付合

諸先行研究は往々にして添削後の前句と添削前の付句との付合を考えているが、この歌仙は江戸で草稿初案の句形で一応巻き上がっていたはずなので、筆者は、最初に、草稿初案の付合のみを五句まとめて検討し、次いで、添削がどのように行われたか、を検証する。周知のように、俳諧では三句のわたりが重要視されるので、裏一句目の打越の表五句目からを検討の対象とする。なお、前述のように、本歌仙においては作者名はあまり意味をなさない、と考えるので、以下の検討では考慮しない。

◎　表五句目　宵月の日和定る柿のいろ

　表六句目　薄の穂からまづ寒うなる

まず、前句である表五句目の句意を知るために、表五句目とその前句との関係を簡単に考えてみる。前句表四句目は「庭とりちらす晩のふるまひ」であるが、『類船集』「振舞（フルマヒ）」の項の付合語に「日和（ヒヨリ）見る」がある。前句「振舞」から「日和見る」を連想し、前句の景気の良い明るさをそのまま受けて、表五句目は「日和」の好転した時節の月の景を詠んだ、と読み解ける。秋の長雨が終わり晴天の続く秋になるのは、関東地方では二十四節気の寒露を過ぎた頃で、柿も色づく頃である。

六句目の「穂」が「寒うなる」とは末枯れる意と解釈し、『類船集』を調べてもこの付合に適する見出し語は見当たらない。ところが『連珠合璧集』の「霜トアラバ」の項には「月／寒・草のうら枯」が、また『拾花集』『竹馬集』の「露霜」の寄合には「冷しき月／草のうら枯・秋寒き」があり、この付合は連歌以来の伝統的連想と言える。この付合は、日和定まった晴天の月光を「月の霜」と捉え、「霜」または「露霜」を「連想を中継する語」として「草のうら枯・秋寒き」を想起して句作した、と読み解くことができる。

表六句目は「草のうら枯」た「秋寒き」景という主題を、薄を素材として表現している。

◎　表六句目　薄の穂からまづ寒うなる

　裏一句目　手を摺りて猿の五器かる草庵

前述のように、「一村薄・淋しき枯野」から「百舌鳥」を「連想を中継する語」として「賤が垣ね・山際の里」を句意とする句を付けた。すなわち、裏一句目は「賤が垣ね・山際の里」の天候不順な秋の困窮という主題を、猿または猿曳を素材として表現した。

◎　裏一句目　手を摺りて猿の五器かる草庵

　裏二句目　みしらぬ孫が祖父の跡とる

『類船集』「猿（サル）」の付合語に「山のかひ・峰の庵／衣うるほす涙・さはぐ心」がある。従って、この付合は、前句を「猿」を句材とし「山のかひ・峰の庵」を句意とする句と考え、「猿」からの連想で、付句を「衣うるほす涙・さはぐ心」を句意として句作した。

裏二句目は「「衣うるほす涙・さはぐ心」を孤独な死のもたらす波紋として表現した。

◎　裏二句目　みしらぬ孫が祖父の跡とる
　裏三句目　脇差はなくて刀のさびくさり

『類船集』「札（フダ）」の付合語に「形見分（ワケ）／刀・脇さし」がある。この付合は、前句の状況から形見分けを思いつき、「札」を「連想を中継する語」として、「刀・脇さし」を想起して句作した、と読み解ける。なお、三句の放れを重視し打越に戻るのを嫌う俳諧において建前上はあり得ないことではあるが、この句の実際の発想には、（猿曳にとって長い刀は単なる飾り物にすぎないところから）全く不要なもののたとえや無用の長物の意で用いられる「猿引の長刀」の語が影響している可能性がある。

裏三句目は形見分けの「刀・脇さし」を前句の家の状態にふさわしく表現している。

②版本の付合

版本の付合は、以下の通りである。

表五句目　きのふから日和かたまる月の色
表六句目　狗脊かれて肌寒うなる
裏一句目　渋柿もことしは風に吹れたり
裏二句目　孫が跡とる祖父の借銭
裏三句目　脇差に替てほしがる旅刀

紙幅の関係で詳しくは繰り返さないが、前述した草稿初案の連想を踏まえた、各句の主題は、そのまま版本の付合に引き継がれていることは了解されるであろう。素材を替えたり、表現を改めたりした添削は、あくまでも原句の主題をより明確にするために行われているのである。前述したように、付合語の連想関係を用いた筆者の調査では、この原則は本歌仙添削の全体に及んでいる。これは、原歌仙を捌き原句の主題を熟知していた芭蕉によって、本歌仙の添削が終始行われたことを証するものであろう。

おわりに

かつて、中村俊定氏は『芭蕉講座』第一巻（創元社、一九五三）で蕉風連句の手法を概説された中で、「匂付」について「前句の中に感ぜられる餘韻とか餘情、或は風韻といつたものをたよりにつないでゆくといふ行き方である。」と解説される一方、「前句が餘情ある句」でない場合など「前句の素材一つに連想を求める場合も、意味を發展させてゆくやうな付け方もあるわけであるが、そういふ場合には、それをあらはに見せないやうに、付句の仕立方に注意を拂つてあしらつていかなければならない」と記された。これは「匂付」と称される中にも「附物」や「句意付」と同様の連想を句作りによって「匂付」にした付合があることを、示唆されたものであろう。

前述したように、俳諧が座の文芸である以上、連衆や版本の読者に理解されない連想では作品は成り立たない。一方、当時の人々の共通理解の範囲内にある連想であれば、一見突飛な連想でも前句から遠く離れる連想でも、読者はその連想について行くことができる。

その共通理解とは、文学的教養や社会的常識・風俗・自然など多岐に渡るであろうが、連歌寄合集や俳諧付合語集はそれらに基づく連想を集大成し、当時の連歌・俳諧の初心者に資するために制作されたものであった。我々現代の読者が、当時の人々の共通理解の範囲内にある連想を知るのにも、連歌寄合集や俳諧付合語集は有力な手掛かりとなる。

芭蕉が撰集に載せることを前提に捌き校合した歌仙全体を、付合語の連想関係を用いて読み解けたことから、筆者は、芭蕉一門のいわゆる「匂付」もこの共通理解の範囲内にある連想であることが示された、と考える。さらに用いられた付合語の内容から考えて、芭蕉一門では、前句の余情を探るに際しても、付句作者の単なる思いつきではなく、連想する一定の道筋、すなわち、和歌・連歌以来のいわゆる「本意」に沿って連想することが理想とされたのではないか、と考える。「匂付」の説明としては今まで取り立てて言及されることはなかったが、前引の「去来曰く「俳諧は新ら敷趣を専らとすといへども、物の本性をたがふべからず。」は、付合における連想の筋道にも該当する内容であろう。

しかし、芭蕉が逝って後、芭蕉の認識していた共通理解の範囲が次第に曖昧になり、それに伴って、遺された作品を理解する際の連想の筋道も、後世の読者には不明な付合が続出するようになった結果、「匂付」という極めて曖昧な表現のもと、それぞれの読者がそれぞれ独自の解釈をするようになったのである、と筆者は考える。

付記

『続猿蓑』『三冊子』『俳諧類船集』『冬の日』は早稲田大学図書館俊定文庫蔵本を、『連珠合璧集』は国会図書館蔵本を参照した。記してお礼申し上げます。